連合駿台会報
No.358 令和4年11月15日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052千代田区神田小川町三―二二
明治大学「紫紺館」内
電話 (〇三)三二九六―四七四七
印刷 有限会社 美創

三枝 富博 氏

連合駿台会九月特別例会

「企業文化を大切にする経営への挑戦」

㈱イトーヨーカ堂
取締役会長 三枝 富博 氏

連合駿台会七月例会を、令和四年九月十五日（木）十七時三十分より、ロイヤルパークホテル「有明」で、㈱イトーヨーカ堂取締役会長・三枝富博氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました（挨拶主旨）。

今日はやや涼しいようですが、猛暑の夏をいかがお過ごしでしたでしょうか。コロナの感染者もやや減少してきましたが、直近のデータを見てみると全国感染者は二千四十万人、日本の総人口・一億二千五百五十万人に対する割合は一六・三％、中でも東京都は三百五万人、人口千四百万に対して二一・八％と、百人に二十二人の感染割合となり、無症状の隔離感染者を含めるともっと数字が増えることになります。今のタイプは重症化率が低いと言われていますが、身体がだるい、倦怠感が抜けない、根気が続かない、集中力に欠けて長続きしない、などの後遺症に悩んで苦しんでいらっしゃる方が大勢おられます。皆様方も感染しないよう、是非オミクロン株対応のワクチンも受けていただき、万全の態勢で臨んでいただきたいと思います。

大学は来週の二十日から対面授業で新学期を迎えます。スポーツでは、ラグビー、六大学野球などのリーグ戦が始まりました。また、連合駿台会の前身である茗水クラブは、来年創立七〇周年の記念の年になります。運営委員会としては、九月の例会時に記念事業を行いたいと考えておりますが、これに関しご意見・ご提案、アドバイス等がありましたら、事務局までご連絡いただきたい。皆様方のご意向を少しでも反映させて、楽しい七〇周年事業にしたいと考えております。

本日の講師は、中国での小売業の先駆者として大成功され、当会の副会長でもある、イトーヨーカ堂の三枝富博会長です。きっと熱いお話を伺えると期待しております。本日は、ご出席いただきありがとうございました。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

＊

世界の構造が大転換期を迎えている

「企業文化を大切にする経営への挑戦」ということで話させていただくが、私自身、大学を卒業して会社に入って、将来どうなるかもわからない中でいろいろやってきたが、一番大切なことは、企業のリーダーを作る考え方や思想であって、そしてその方々が考えた「社風」というのが一番大事なのだろうと思う。今日は、中国で学んだことを今にどう生かせるのか？　五月より会長職を拝命した日本チェーンストア協会では若い方も多く、互いに御しにくいと感じられることも多いだろうが、そういう中でも通じるものがあるのではないかと思っている。

まず話に入る前に、そもそも世の中はどうなっているのか、これは私の認識としてお聞きいただきたいが、世界の構造が大転換期を迎えている。インターネットの普及、デジタル技術の革新などが進むことによって、法体系や政治制度、あるいは警備システムなども変わってきて、新しいルールが求められる変革期に入ったのではないかと思う。さらにコロナによって、多くのことが変わってきた。皆さんご存知ように、百年前に流行ったスペイン風邪では一億人が亡くなった。コロナはやや収束してきたが、すでに世界中で六千五百万人の方が亡くなり、このままいけば一億人に到達することは目に見えているわけで、こういった大きな災害の後、世の中はどうなっていくのだろうか。今まで誰もが経験したことのなかった社会に変わっていくのではないか。そこで求められることや価値観も大きく変わってくるだろう、というのが第一点。

二点目は、個人や組織のあり方が大きく変わったということ。私が大学を出る頃は、サラリーマンなら五十歳代になれば、人生もそろそろ黄昏、石川達三さんの本ではないが、もう人生の最終局で、後はどうやって安定した老いを迎えるか……、みたいな感じだったように思う。しかし今は「人生一〇〇年時代」、「人生五〇年時代」とはキャリア観も異なってきているし、組織が個人に求めるものもどんどん変化してきた。

そして三点目には、企業は規模を大きくしたり利益を出せればいいというのではなく、企業としていかに世界や社会に貢献ができるかによって、その存在は実証されるようになった。多分、大きくはこの三つのことがあげられるのではないかと思う。

私は学生の頃は勉強嫌いだったが、社会人になって信頼する多くの経営者の方から、いろいろと学ばせていただいた。二千五百年前の中国の思想家で儒教の祖である孔子の言行を、死後に弟子たちが編纂した『論語』をはじめとして、渋沢栄一さん、松下幸之助さん、稲盛和夫さん、そして私どもイトーヨーカ堂グループの創業者・伊藤雅俊さん、セブンイレブンの設立者・鈴木敏文さん、そして私が尊敬する塙昭彦さん……。これらの方たちが共通していることは何だろうと考えると、生きること、そして仕事をすることの目的は何なのか？　大義はどこにあるのか？　ということになる。そしてそれは自分のためにやるわけではなく、貢献すること。そのためには人を支えなければならない。リーダーとしてそういう生き方ができているかどうかが常に求められている。そしてその答えを、古典や書籍を通して教えていただいた気がする。つまり本当の意味での勉強が始まったのは、四十歳代後半からと思っている。

人生の転換点となった人との出会い

大学を卒業して、三年間大和証券に勤務した後、イトーヨーカ堂に中途入社したのだが、当時の現場担当者が叩き上げの人で、最初に言われたのが「お前、ちょっと少年マガジン買って来い」ということだったのはショックだった。その時思ったのが、この業界に入ったのだから、この中でナンバーワンになろう、そうして調整していけば、きっとわかってくれる人もいるだろう……、という思いを強くしたものだ。

その後、本部配属になり、商品部の仕事、取引先やメーカー、産地などと組んで、それ

を店頭に並べて販売促進する、といった商品部の仕事を、二十年ほどやっていた。そのうち、取引先からすごく褒められ、業界の華だ、などと言われるようになると、人間は単純だから、そんなに実力がついたのか、と錯覚していた。自信はあったし仕事自体も面白かったのだが、会社の組織運営にはどうも納得できないでいた。皆さんもご存知かと思うが、セブン-イレブンを立ち上げ、「小売の神様」とまで呼ばれた鈴木敏文さんが、当時はイトーヨーカ堂の社長になられていた。商業に科学を取り入れたようなカリスマ経営者だが、とにかくトップダウン。毎週報告会があり、そのために半年くらい前から準備を重ね、そこでOKが出れば生き残れるが、ダメならば翌日には辞令が出て、役員でも飛ばされてしまうことすらあった。これでいいのだろうか？　と思っている時に、初めて海外に出る、中国に出店するという話が出てきて、この中国ビジネスに大きな魅力を感じた。時の副首相李嵐清氏が「高級店ではなく大衆が豊かになれる店をつくって欲しい」といわれたという話を聞いて意気に感じ、新たな可能性に挑戦したいとも思っていた。

また、中国ビジネスのトップリーダーとなる人物との出会いが、私の心を揺さぶったのも事実だ。イトーヨーカ堂で営業本部長を務めていた塙昭彦さんという方で、塙さんは鈴木社長にも直言するような気骨ある人物だったが、九六年に専務取締役中国室長となり、たった一人で中国ビジネスを立ち上げることになった。ただ一人では動きがとれないので、中国に行くメンバーを募るのだが、塙さんは人事部が選んだ優秀な人材ではなく、自分と一緒に中国に行きたいと思う〝同志〟を自ら募ったのだ。

その条件は三つ、①利口はいらない、②バカもいらない、③私が求めている者は大バカ者だけだ、というものだった。「利口はいらない」というのは、頭はよいが行動が伴わないタイプはいらないということ、「バカもいらない」は文字どおり。「大バカ者」というのは、愚直でも精いっぱい努力し、ゼロから物事を考え、それを組み立てていける人を指す。何が起きるかわからない不確定要素だらけのマーケットに漕ぎ出すわけだから、ゼロベース思考ができ、なおかつ実行力のある人が欲しいということだったのだと思う。

九七年十一月に成都市春熙（しゅんき）店が一号店としてオープンした。成都は四川省の省都だが、当時は現在のような近代都市化する前夜で、中国風情が味覚や町並みなどあらゆる生活環境に充満していて、郷愁を誘う様相だった。結果、お客様が来たのははじめの一週間だけで、その後は閑古鳥が鳴いているような状況になる。当時の中国社会は、〝遅れている〟という認識の下、現地の状況を無視して、売り場には八割以上〝進んでいる〟日本の商品を日本の店舗と同じように並べてしまったのだが、これは明らかにわれわれのおごりで、中国やその他アジア諸国から学ぶものはないという傲慢な態度に起因するものだった。

結果的に、中国市場では日本のやり方のままではダメだった。また現地従業員も、指示されたらやるが、見ていないと何もしないという、〝面従腹背〟の状況だった。でもそれは、われわれが「黙ってついてくればいい」という上から目線で対応していたからだったのだ。このままではダメだと思い、それから二年以上かけて、手探りでマーケットを見聞し、そしていろいろな本を読み、そこに解を求めた。思い込みを捨て、中国人の目線で考え、日本のやり方を下敷きにすることはやめようと決めた。そして、人を育て、組織をつくることに注力するようになった。

さまざまな試練も地域貢献で乗り越えて

当初は三年から五年くらいという感じで中国に行ったのだが、結果として二十一年間もいることになった。ここで走りながら考え、実行し続けたことは、〝中国人のために何ができるか〟を合言葉に、目標は大衆に喜んでもらえる店舗を作ること、そして中国人社員と同じ基準を持ち、同じ目線で実践し、結果

を出すことだった。お客様第一主義の信念のもと、自ら中国に近づき、寄り添い、共に学び、変化対応につとめ、中国人と切磋琢磨しながら一緒に成長してきたと思う。

　またこの間には自然災害、反日デモを含め、さまざまな試練にも見舞われた。二〇〇三年に中国を襲った新型肺炎によるSARS騒動は、特に北京で影響が大きかったが、徹底的な衛生管理と迅速な対応で危機を乗り越えた。二〇〇八年五月には、マグニチュード七・九の四川大地震が成都を揺さぶった。当時、私は成都三店舗を率いる総経理（社長）だった。今まで地震をあまり体験したことがない地域で、危機管理の体制は整っていなかったので、日本での経験が生きた。まずお客様を無事に避難させ、従業員には「明日開店するぞ。被害状況をチェックしなさい」と命じた。安全が保証できると確信すると、翌日には全店舗を開店する決断を下した。同時に、商品部の従業員には水やコメ、インスタントラーメンなどの調達にトラックを走らせた。緊急時だからこそ、物資の提供という社会的責任がある、という思いからの行動だった。

　地震などの災害時に最善をつくしたことで、日系企業のイトーヨーカ堂は信頼できるという地域の信頼を得ることができたのだ。地震の翌日に開店したその数日後には、成都市の幹部や共産党幹部が来店して、地震後の迅速な対応に対して、我々に感謝の意を表明した。市内の小売店のほとんどが営業できない状況の中で、客は押し寄せるようにやって来たが、従業員全員が一丸となって対応した。同年十二月には、中国改革開放三十年の流通業界の功労者三十人に、外国人でただ一人選ばれた。その理由は極めて明確で、まず、一つの地域で十年以上継続して経営してきたこと、きちんと納税していること、そして地域に貢献していること。当たり前に思われる項目ばかりだが、当時の中国では達成が難しい内容だったのだ。

企業文化、企業風土を変える経営

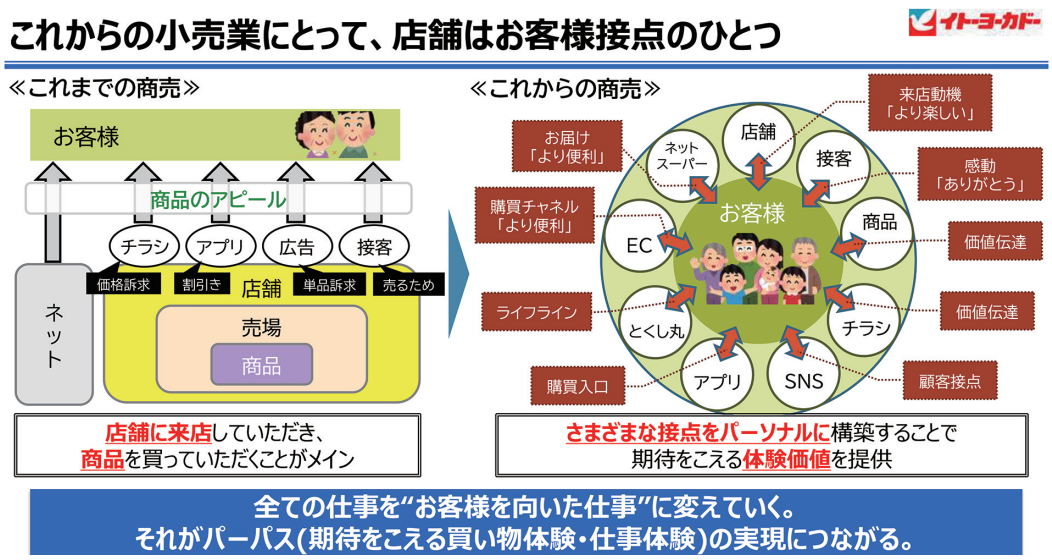
　中国での二十年の経験を買われて、二〇一七年の帰国後、すぐに社長に就任したのだが、少なくとも求められているのは、尖った事業戦略ではないことは確かだと思った。私が中国でやってきたのは人づくりや組織づくり、そして企業づくりだから、いますぐ使える戦略を期待されたわけでなく、その部分を生かした貢献が求められていたと思う。

　社長就任直後のビジネス誌のインタビューで、「私は伊藤派でも鈴木派でも何でもありません。……私は『イトーヨーカ堂派』なんです」と答えた。前年にセブン&アイHDの鈴木敏文会長が突如退任し、二十年ぶりに見た日本のイトーヨーカ堂の業績が悪くなったことは数字を見ればすぐに把握できた。その理由を探ってみると社員の考え方が受け身になっていることに気づいた。強烈なトップダウンによる経営が二十年以上続いたため、社員が自分の頭で考え、物事を前向きにジャッジし行動することができなくなっていた。それまで行われてきたトップダウン経営のすべてを否定するわけではないが、上から言われたことしかやらず、お客様のためでなく自身の損得や保身のために仕事をするといった状況を、まず変えなければならないと考えた。

　伊藤雅俊名誉会長は「常にお客様のことを考えろ。お客様あってのわれわれだ」と常々言われたが、中国でのビジネスでも日本での事業の立て直しでも、そうしたイトーヨーカ堂の原点に立ち返ることが不可欠だったと思う。だから成長戦略ではなく、まず企業文化、企業風土を変えることが急務だった。それができなければ、どんなにすばらしい戦略を立てたとしてもおそらく定着せず、機能しないと思った。

　トップダウンの状況と風土があったので、企業文化を変革するためには二十年くらいは必要かもしれないが、五年から十年で変わっていかなければならないと考えた。社長就任から五年後に会長職に就いたが、変革はまだまだその途上だと思う。ただ徐々に土壌が変わり、変革の芽はたくさん出てきた。たとえ

ばこの五年間で八十店ほどが店舗構造改革を行ってきたが、その中で社員たちが自分で考えて、自発的にさまざまな意見を出し、実践するようになってきた。



そうした前向きな切磋琢磨ができるようになってきたので、もう次の世代に任せたほうがいいと思った。早く次代に繋ぐのが私の役割だと思っていたので、三月に私より二十歳も若い新社長に後任を託した。五月からは日本チェーンストア協会の会長も拝命した。

昨年に創業一〇〇年を迎えたイトーヨーカ堂が、どうして今日までやってこられたのかというグループの歴史に目を向ける必要はあると思う。その間、ずっと右肩上がりで成長してきたわけでなく、当然浮き沈みはあったが、それでも残ってきたということは、創業の精神を忘れず、お客様やその他のステークホルダーに対して誠実な商売を地道に続けてきたからだと思う。

イトーヨーカ堂では、二年半前にコロナ感染が拡大し始めてから、毎朝「新型コロナ対策会議」を続けている。議題はコロナに限らず、日々世の中で起きている出来事に自分たちはどう対応すべきか、という内容になっており、マーケットの動きやお客様の声などを含め多岐にわたる。会議にはリモートを含め八十名が参加し、その議事録は各店舗に送られ、情報共有される。このように各人が自ら考える習慣を身につけることが、企業風土の変革につながると確信している。イトーヨーカ堂は、グループ内企業の軸となる経営理念をつくってきた。多くのステークホルダーの

【講師略歴】

三枝　富博（さえぐさ・とみひろ）

一九四九年十二月十五日生まれ
神奈川県出身
一九七三年三月　明治大学法学部卒業

【職歴】
一九七三年四月　大和証券㈱　入社
一九七六年九月　㈱イトーヨーカ堂　入社
一九九六年一月　成都イトーヨーカ堂㈲　出向
二〇〇六年三月　成都イトーヨーカ堂㈲　総経理
二〇〇九年五月　成都イトーヨーカ堂㈲　董事長
二〇一二年三月　㈱イトーヨーカ堂　執行役員
中国室長兼中国総代表
二〇一三年三月　㈱イトーヨーカ堂
常務執行役員
中国室長兼中国総代表
二〇一七年三月　㈱イトーヨーカ堂
代表取締役社長
兼中国事業部管掌
㈱セブン&アイHD
常務執行役員
二〇二二年三月　㈱イトーヨーカ堂
取締役会長就任（現任）

【受賞歴】
・二〇一五年　成都市人民政府より
成都市栄誉市民の称号
・二〇二〇年　四川省人民政府より
「天府友誼賞」
・二〇二〇年　中国政府国務院より
「中国政府友誼賞」

中で大切なのは、まずお客様、そして会社をつくる従業員の順であると私は考えている。

最後に「これを知る者は、これを好む者に如かず、これを好む者は、これを楽しむ者に如かず」という論語の教えで締めくくりたい。これを仕事にたとえると、その仕事を知っているだけの人は、仕事を好きな人にはかなわない。さらにその仕事を好きなだけの人は、仕事を楽しんでいる人にはかなわない、ということになるのだろうか。日々の仕事を義務感でやるのではなく、その仕事を好きだという気持ちを持つ。そうすると、努力を努力と感じることなく、仕事に没頭することができる。そうすると、自然と上達して、結果に繋がり他の人の役に立つことができて、それが楽しさにも繋がっていく。自分が夢中になれることに集中し、前向きに楽しめる人生を生きていきたいと思っている。

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。

（敬称略・到着順）

那須（なす）　英文（ひでふみ）
昭和五十五年・商学部卒
㈱錦屋商事
代表取締役
宮崎県延岡市在住

小松（こまつ）　健（たけし）
昭和五十七年・工学部卒
㈱安藤・間
取締役常務執行役員・営業本部長
東京都港区在住

山根（やまね）　俊明（としあき）
昭和六十三年・政経学部卒
㈱産経新聞制作
代表取締役社長
東京都台東区在住

鷹野（たかの）　雅央（まさお）
平成二十二年・経営学部卒
タカノ㈱
取締役部門長
長野県上伊那郡在住

◆明大ニュース

●第二十五回ホームカミングデーを開催

年に一度、校友やその家族を母校に迎える「第二十五回ホームカミングデー」が十月二十三日、駿河台キャンパスで開催された。コロナ禍のため過去二年間はオンライン開催となっていたが、今年度は三年ぶりに対面形式での開催となった。キャンパスへの入構は特別招待校友とその家族のみとして制限があったものの、三千人もの校友が集い、懐かしい旧友や恩師との再会、学生との交流など晴れやかな秋の一日を満喫した。

アカデミーホールで挙行された記念式典は、フリーアナウンサーの阿部佳乃氏（二〇一一年文卒）の司会で進行。美濃部仁運営委員長（国際日本学部教授）の開会の辞に続き、主宰者の柳谷孝理事長は、「母校へおかえりなさい」と歓迎の意を示すとともに、「明治大学が世界に開かれた大学、世界に発信する大学として未来に輝き続けて参りたい」と力強く宣言し、校友からのさらなる支援への理解を求めた。

続いて大六野耕作学長によるビデオメッセージが放映された。大六野学長は、「様変わりした神田駿河台の街並みやキャンパスに驚嘆された方もおられるでしょうが、今日は一日それぞれの学生時代を思い出しながらお楽しみいただきたい」と校友に呼び掛けた。

来賓の北野大校友会長は「校友の皆さまがご家族を連れ、母校を案内する様子を見られることが毎年の楽しみ。三年ぶりにキャンパスでの開催となりうれしく思う」と笑顔を見せた。

その後、卒業後60・50・40・30・20・10年に当たる特別招待校友をそれぞれ代表し、▽漫画家の西村宗氏（一九六二年農卒）▽㈱桔梗屋の元代表取締役社長の中丸眞治氏（一九七二年商卒）▽有限責任監査法人トーマツの

前包括代表の國井泰成氏（一九八二年経営卒）▽刀鍛冶の川﨑晶平氏（一九九二年政経卒）▽お笑い芸人「響」の小林優介氏（二〇〇二年経営卒）▽モデル・ライターの斉藤アリス氏（二〇一二年農卒）の六氏が、在学中の思い出や現在の仕事、母校への思いなどを語った。さらに、事前オンライン寄付者を対象とした福引抽選会、校歌静聴と続き、記念式典は終了した。

記念式典の後には、講演会や学生らによるパフォーマンスなど多数のプログラムを開催。初となるお笑いライブや恒例の物産展、キッズコーナーも多くの人が楽しんだ。

●理工・小野教授に「児玉圭司『願晴る』研究振興賞」

九月二十六日、駿河台キャンパス・矢代操ホールにて「児玉圭司『願晴る』研究振興賞」授賞式が挙行された。これは、本学校友の児玉圭司氏（一九五七年経営卒・体育会卓球部総監督）による寄付金を原資として、研究で顕著な功績をあげた本学の教員を表彰する賞で、過去五年間の国際研究論文の論文数や被引用数等の評価を基に表彰者を決定している。

受賞式では二〇二一年度受賞者の小野弓絵理工学部教授への表彰が行われた。小野教授の研究分野は、脳神経科学、生理学、計測工学で、研究テーマは非侵襲脳機能イメージングによるニューロリハビリテーション、意思の可視化。

表彰状授与および目録贈呈の後、大六野学長は「脳科学分野での研究を積み重ねられ、ひとつの形として結実していることが評価されての受賞となった。これからも研究に精錬され、さらなる業績を残していただきたい」と小野教授を激励した。

続いて児玉氏があいさつに立ち、「小野教授の研究は世の中から必要とされている分野。その成果が多くの人々に希望の光をもたらすことを期待している」と述べるとともに、振興賞の名前につけられた「願晴る＝願いを込めて晴れやかに努力する」という言葉に込めた思いを紹介した。

表彰を受け、小野教授は今回の授賞をはじめ大学からの研究支援体制について謝辞を述べるとともに、「以前、在外研究先となった米国イェール大学とは、学生の送り出しや受け入れなど、草の根レベルでの交流を現在も続けている。今回の受賞理由に『研究の国際化』という点も評価していただいたことをうれしく思う。これからも研究を進め、明治大学のために力を尽くしていきたい」と意気込みを語った。

●和泉ラーニングスクエアで「寄付者アドバイザリーボード」

学校法人明治大学は十月八日、和泉ラーニングスクエアで、寄付者アドバイザリーボードと、「明治大学創立一四〇周年記念事業募金」座席芳名プレート顕彰寄付者を対象とした施設見学会および連合父母会から寄贈されたグランドピアノお披露目コンサートを開催した。

午前中に行われた寄付者アドバイザリーボードは、高額寄付者である特別紫紺賛助員と紫紺賛助員に対して本学が助言を仰ぎ、事業に反映することを目的としたもの。特徴的な施設の一つである「カイダン教室」を会場に十七人が参加した。

冒頭、柳谷孝理事長があいさつに立ち、これまでの支援・寄付への謝意を表したうえで、「明治大学がアジアのトップユニバーシティとして輝き続けるためのご助言を賜りたい」と述べ開式した。続いて、大六野耕作学長による「いま、必要な教材は、キャンパスだと思う」と題した講演では、「課題解決能力を養うため、『異質な意見』がぶつかりあう環境として設計された」とコンセプトを紹介。さらに、「『国際的な大学といえば明治』と評価されるように取り組みたい」と意気込みを語った。

午後からは、寄付者と父母会役員約三百人らが参加して、同施設内「和泉ホール」の座席に設置された芳名プレートの見学を含めた施設見学会とコンサートが行われた。施設見

学会では、日頃から大学見学に訪れた高校生にキャンパスを案内している学生プロジェクトのメンバーが先導し、館内の設備とともに、対面授業再開後のキャンパスの様子なども紹介された。

連合父母会から寄贈されたグランドピアノを「和泉ホール」ステージに設置して行われたコンサートは、明治大学シェイクスピアプロジェクトの学生らが司会を務め、公認サークル「ピアノの会 KLAVIER」による演奏と「明治大学混声合唱団」による合唱の計九曲が披露された。一日を通じて、寄付者・父母会役員・明大生との活発な交流が行われ、有意義な催しとなった。

●OB社長

▽㈱PFU＝村上清治氏（一九八五年経営学部卒・六十一歳）

▽トルンプ㈱＝高梨真二郎氏（一九九四年理工学部卒・五十二歳）

▽㈱ベクター＝渡邊正輝氏（二〇〇一年理工学部卒・四十四歳）

▽㈱プラネット＝坂田政一氏（一九八三年工学部卒・六十三歳）

●二〇二二年度「秋季入学式」

新入生八十四人・ウクライナ学生七人が出席

二〇二二年度秋季の入学者八十四人（学部十一人、大学院・専門職大学院七十三人）が明治大学に入学した。秋季入学者は海外からの学生や社会人学生が中心で、国際日本学部の English Track や専門職大学院に入学している。

九月十九日に駿河台キャンパス・アカデミーホールで挙行された秋季入学式には、新入生と共に、秋学期から科目等履修生として明治大学で学ぶウクライナからの受け入れ学生七人も参加した。

告辞に立った大六野耕作学長は、新入生らを歓迎するとともに、「『同心協力』の精神で、共にこの困難な時代を乗り越え、明るい未来を切り開いてまいりましょう」と日本語と英語で語りかけた。

続いて、柳谷孝理事長は祝辞で「他者を認め自己と向き合い、自ら考える材料を発見し、考え抜く力を磨き続けていくことこそが、『個を強くする』という本学のモットーの神髄」だと紹介し、新入生にエールを送った。

★ウクライナ受け入れ学生と大学役職者の懇談会

秋季入学式に続いて、ウクライナからの受け入れ学生と大学役職者との懇談会の席が設けられた。出席した役職者は大六野学長をはじめ、受け入れ学生らが所属または授業を受ける学部の学部長と、関係副学長の計七人。

数日前に来日したばかりの学生らは、ウクライナ語通訳を交えながら、英語や日本語で、これから始まる日本での生活や明治大学での学びへの期待の言葉を述べた。

それを受けて大六野学長は、「先行きが見えない状況だが、明治大学にいる間は多くの友人を作り、最大限に学生生活を楽しんでいただきたい」と学生らを歓迎した。

●理工学部

聖マリアンナ医科大との共同研究会

二〇二二年度の「明治大学・聖マリアンナ医科大学共同研究会」が九月十七日、聖マリアンナ医科大学教育棟（川崎市宮前区）で開催された。

明治大学と同大は二〇一三年に大学交流に関する包括協定を締結。この研究会は、両大学の抱える研究ニーズ（需要）とシーズ（種）に関する報告会やポスターセッションを通して、双方の研究への理解と新たな共同研究の発足を促すことを目的として企画され、今回は三年ぶり五回目の開催となった。

開会のあいさつには、聖マリアンナ医科大学の北川博昭学長と明治大学の立川真樹理工学部長が登壇し、それぞれ両大学の研究のマッチングに対して期待を述べた。

第一部「共同研究紹介」には、理工学部から納富充雄教授と金子弘昌准教授が登壇し、それぞれ「脳振盪の原因となる頭部の変形に

ついての一考察」（納冨教授）、「数理モデルの直接的逆解析による分子設計・材料設計・プロセス設計」（金子准教授）と題した共同研究の内容が紹介された。

続く第二部「研究紹介」には、本学から紀藤圭治農学部教授、中村和幸総合数理学部教授、榊原潤理工学部教授が登壇した。

第三部「ポスターセッション（交流会）」では、本学から大学院生も登壇するなど若手研究者を中心に両大学間で活発な意見交換が行われ、盛会のうちに終了した。

●国家公務員総合職試験合格者二十人に報奨金を授与

国家試験指導センター行政研究所（所長：西川伸一政治経済学部教授）は十月十四日、二〇二二年度国家公務員総合職試験に最終合格した同研究所所属学生二十人への報奨金授与式を、駿河台キャンパス・岸本辰雄ホールで執り行った。

式典の冒頭、あいさつに立った西川所長は合格者の努力をねぎらうとともに、中国の古典『菜根譚』から「苦しみに打ち勝つことを楽しみとする」という言葉を紹介し、「この心構えでさまざまな難関を乗り切ってほしい」とエールを送った。続く大六野耕作学長は、「行政機関は戦後の日本を支える上で大きな役割を果たしてきたが、今まで通用していたものが今後も通用するのか、次の時代を切り開く鍵は何かということを常に考えてほしい」と合格者を激励した。

合格者を代表して謝辞を述べた上田敏さん（法学部4年、文部科学省内定）は行政研究所をはじめ関係者への感謝を述べたうえで、「国民を守り、国全体を発展させるべく働く国家公務員は、一人ひとりが強い当事者意識を持って行動することが求められる。『個』を強くする学風の下、自ら未来を切り開く力を育んだ明大生として、どのような困難にも立ち向かっていく」と決意を述べた。

今回、報奨金を授与された学生二十人は以下の通り（敬称略）。

▽上田敏（法4）▽勝見明也（法4）▽畑中咲（法4）▽横内亮介（法4）▽品川達哉（政経4）▽鈴木紀哉（政経4）▽高橋直己（政経4）▽長田雄樹（政経4）▽花井祐太（政経4）▽古川太一（政経4）▽水戸敦久（政経4）▽岡村瑛葉（経営4）▽新井梓文（理工4）▽猪熊隼也（理工4）▽尾上綾（農4）▽猿谷琉真（農4）▽鈴木直人（農4）▽阿部えれに（農研M2）▽目崎凱己（農研M2）▽齋藤由花（農研M2）

●明治大学とスケート部・樋口新葉選手に文部科学大臣表彰

明治大学と体育会スケート部の樋口新葉選手（商学部4年）が、九月二十八日付で文部科学大臣表彰を受けた。

この表彰は、世界的規模のスポーツの競技会において優秀な成績を収めた選手および指導者やスポーツ活動に対して多年にわたる支援をしている団体などに対して、文部科学大臣がその顕著な功績を讃えるもの。樋口選手は、二〇二二年に行われた北京五輪に出場し、フィギュアスケート団体戦でのメダル獲得に貢献した功績が認められた。また、その支援団体として明治大学も表彰された。

同日、八芳園「ジュール」（東京都港区）で行われた授賞式には、樋口選手と体育会スケート部の佐々木創監督（二〇一五年法学部卒）が出席した。

明治大学関係者では、体育会卓球部の宇田幸矢選手（商学部3年）、戸上隼輔選手（政治経済学部3年）、柔道指導者として校友の吉田秀彦氏（一九九二年経営学部卒）らも受彰者に名前を連ねている。

★樋口選手が大六野学長に受彰を報告

十月十四日には、樋口選手と佐々木監督が大六野耕作学長を訪問し、改めて同受彰について報告を行った。報告の席で樋口選手は、大学関係者らへの謝辞とともに、「（東京六大学野球リーグ優勝でパレードや祝勝会が行われた）硬式野球部のように、いつか明大生の皆さんとパレードができたらうれしいです」

と笑顔を見せた。

大六野学長は受彰を喜ぶとともに、「樋口さんは日本を代表する選手。これからも大学を挙げて応援しています」と激励の言葉をかけた。

●ソフトテニス部

女子団体・米川選手がインカレ優勝

九月三日～七日に山口県でソフトテニス各種目の全国大会（インカレ）が開催され、体育会ソフトテニス部は、第76回文部科学大臣杯全日本大学対抗ソフトテニス選手権大会（九月三日～四日）で、女子が五十九年ぶりの優勝、男子が三位となった。

また、第77回三笠宮賜杯全日本学生ソフトテニス選手権大会（九月五日～六日）で、主将の原口美咲選手（商学部4年）・西東彩菜選手（商学部3年）のペアが女子の部で準優勝。第64回全日本学生ソフトテニスシングルス選手権大会（九月六日～七日）で米川結翔選手（商学部2年）が男子の部で優勝、原口選手が女子の部で三位となった。

★女子選手らが優勝を学長・理事長に報告

ソフトテニス部は、九月二十七日、駿河台キャンパス・大学会館で、インカレでの女子団体優勝などについて、体育会会長の大六野耕作学長、柳谷孝理事長らに報告を行った。この日訪れたのは、原口主将、副将の木瀬晶絵選手（政治経済学部4年）、柿沼明里選手（政治経済学部4年）、齋木菜々花選手（経営学部3年）の四選手と、櫻井智明監督や同部OGで駿台体育会会長の畠中君代氏ら部関係者四人。

大六野学長、柳谷理事長が女子団体の五十九年ぶりの優勝などについてねぎらいの言葉をかけると、選手らは「優勝した瞬間はその実感がなかったが、こうして皆さんからお祝いの言葉をいただいてうれしい気持ちです」と笑顔を見せた。

●プロ野球ドラフト会議

村松選手が中日ドラゴンズから二位指名

十月二十日に行われたプロ野球ドラフト会議で、体育会硬式野球部の主将・村松開人選手（情報コミュニケーション学部4年）が中日ドラゴンズから二位指名を受けた。

東京・府中市の硬式野球部合宿所で山本雄一郎部長（商学部教授）、田中武宏監督と共にドラフト会議の生中継の様子を見守っていた村松選手。指名の瞬間には緊張の面持ちを崩さなかったが、田中監督から肩を叩かれるとようやく安堵の笑顔がこぼれた様子だった。

その後、三人で臨んだ記者会見で村松選手は、「小さい頃から目標だったプロ野球界に指名していただいて素直にうれしく思う」と喜ぶとともに、「自分の強みである脚力やミート力（バットの芯で捉える技術）をプロの舞台でもアピールしていきたい。やっとスタートラインに立ったところなので、しっかり結果を出していきたい」と決意を述べた。

今回の指名で、明治大学からのドラフト指名は史上最長となる十三年連続となった。

●自転車部

インカレ男子ロードレースで創部初の総合優勝

女子渡部選手（政経2）も二冠達成

体育会自転車部は、九月一日から四日に鹿児島県南大隅町、錦江町で開催された「第77回全日本大学対抗選手権自転車競技大会」に出場し、男子ロードレースで創部史上初の総合優勝を達成した。さらに、女子部門で、渡部春雅選手（政治経済学部2年）が個人ロードレースと3㎞インディヴィデュアルパーシュートで優勝し二冠、さらにオムニアム種目で三位に入賞するなど目覚ましい活躍を見せた。

男子ロードレース（一四五・二㎞）は最終日に開催され、白尾雄大選手（理工学部4年）が二位、村上裕二郎選手（経営学部2年）が六位、林原聖真選手（法学部1年）が九位に入賞。アップダウンが激しく連日の雨で湿ったコースでの厳しいレースとなり、出場選手のうち約四分の三が完走できなかった

中で三人が上位入賞を果たし、同種目で初の総合優勝となった。

渡部選手は今シーズン不調が続いていたが、大会直前から調子を上げ、初日のインディヴィデュアルパーシュートで見事優勝。さらに、最終日のロードレースでは後続に大きな差をつけて優勝を勝ち取った。

●拳法部

木村選手が全日本拳法個人選手権で連覇

体育会拳法部の木村柊也選手（文学部4年）が、九月二十五日に丸善インテックアリーナ（大阪市中央体育館）で行われた「第62回全日本拳法個人選手権大会」で優勝し、連覇を達成した。同大会はコロナ禍のため三年ぶりの開催となる中、二〇一九年に一年生で優勝した木村選手が再び優勝し、見事連覇となった。

木村選手は、「二〇一九年に最年少優勝を果たし、学生初となる四連覇を目指していましたが、二〇二〇年・二〇二一年とコロナ禍で中止となり、その夢を叶えることはできませんでした。しかし、大会が中止となる中、諦めずに精進した結果が今回の優勝という形になったと思います。応援いただいた皆さまに感謝いたします」と連覇の喜びを語った。

木村選手は十月二十三日にパロマ瑞穂アリーナ（愛知県名古屋市）で開催された「第37回全日本学生拳法個人選手権大会」でも優勝し、同大会三連覇を達成した。

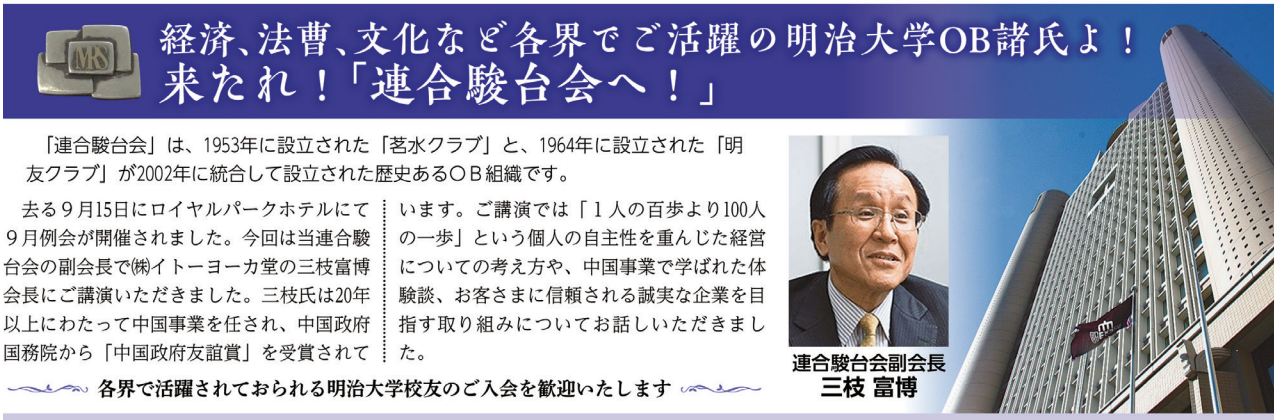
●競走部

箱根駅伝予選会を二位突破 五年連続六十四回目の本大会出場へ

二〇二三年一月二日・三日に開催される第99回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）への出場校を決める予選会が十月十五日に行われ、体育会競走部は二位で本大会への出場権を獲得した。

予選会は、一大学12人までの選手がハーフマラソンコース（二一・〇九七五km）を同時に走り、大学ごとに上位10選手のタイムを合計。この10選手の合計タイム上位10校が、箱根駅伝本大会への出場権を手にする。今年は三年ぶりに、陸上自衛隊立川駐屯地から市街地に繰り出し、国営昭和記念公園をゴールとするロードレース形式で開催された。

参加校四十三校が挑んだ今回の予選会、レース序盤から本学の富田峻平選手（経営学部4年）、児玉真輝選手（文学部3年）の二選手が日本人先頭集団をけん引する走りを見せた。5km通過地点の上位10選手の合計タイムは2時間29分28秒で一位、その後も一〇・一五km通過地点でも順位を維持した。最後は10時間41分41秒の二位で五年連続六十四回目の本大会出場を決めた。



★明治大学広報（11月1日号）に掲載された大学への支援広告。今後も2ヵ月に1回掲載していく予定です。

◆駿台トピックス

●第二十回連合駿台会ゴルフ会を開催

連合駿台会のゴルフ会の秋期ゴルフコンペが、十月四日、我孫子ゴルフ倶楽部で、十八名の参加のもと開催されました。当日は絶好の天候に恵まれ、コロナウイルスの水際対策も大幅に緩和されつつある中で、素晴らしいゴルフ日和となりました。

ダブルペリア方式による成績結果は、優勝は栢森靖会員（昭和五十四年・工卒）、準優勝は室井恵明会員（昭和六十二年・文卒）、三位は神林光会員（平成十五年・法卒）で、ベストグロス賞は、43・45で唯一80台で回った山口大介会員（平成十二年・政経卒）でした。優勝者には陶芸家武内裕会員作の優勝カップが、二位と三位には寄贈された陶器のお皿と茶碗がそれぞれ副賞として贈られました。

◆九月例会出席者

相澤淳一、青木幹則、青柳勝栄、浅井宏、安達明正、阿部倫明、同ご同伴、池田一義、石川かおり、伊東正博、同ご同伴、伊原敏雄、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、大石哲也、大野正美、大原幸男、大前実之、奥村勝広、鬼塚和也、金子圭太、狩野省市、栢森靖、河村博、神林光、北野大、清野明男、草木頼幸、國井泰成、久保聡、黒崎昭男、小池徹、小井戸亮文、小島清治、児玉圭司、小山修、小山有彦、根田哲雄、齋藤柳光、三枝富博、同ご同伴、坂田英夫、坂本道昭、佐藤健、佐藤仁、佐野公哉、志田憲彦、柴尾雅春、杉浦伸二、鈴木隆志、同ご同伴、関根均、髙澤徹、高見克司、竹内太一、谷原誠、田村駿、樽見俊之、当山明彦、徳丸平太郎、冨田浩志、富水流孝二、中野祥宏、二井康夫、西澤豊、野口一哉、萩原裕次、長谷川進一、畠中君代、幡谷公朗、馬場範夫、林威樹、平田桂子、深代尚夫、同ご同伴、福田和彦、同ご同伴、福見勉（代理）、藤代耕一、古本英樹、槇野泰、松崎優子、三浦栄治、村岡健、室井恵明、柳谷孝、山口政廣、山田憲典、山田朝彦、山村明好、弓野理恵、吉田光一郎、渡邊建三

【編集後記】

少し前になりますが、映画「島守の塔」を鑑賞してきました。観に行きました映画館で舞台挨拶が偶然ありまして、監督を始め、出演された萩原聖人さん、村上淳さん、香川京子さんを直接拝見することができました。実物の香川京子さんはとても品の良さとかわいらしさがあり、さすが往年の大女優だなと感じました。

さて映画「島守の塔」は、太平洋戦争末期の沖縄戦で県民の命を守るべく、島田叡・沖縄県知事と、明治大学ＯＢである荒井退造・沖縄県警察部長の奮闘を描いた作品です。このお二人の尽力により約二十万人の沖縄県民の命が救われたと言われています。

「島守の塔」を鑑賞して、改めて命の尊さと戦争の残酷さを改めて痛感するとともに、荒井警察部長と島田知事が沖縄県民を守ろうと懸命に尽くす姿に非常に心を揺り動かされました。また沖縄に赴任する前の荒井退造さんと家族との温かなやり取りがあるのですが、やがて訪れる結末を知っているだけに、言いようのない悲しさを感じました。この荒井退造さんが明治大学のＯＢであることに校友としてとても誇りに思います。

「島守の塔」を見ながら、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻の映像と重なるシーンがとても多く、結局戦争は私たちの生活を破壊し、いとも簡単に奪い去ってしまうということを改めて認識するとともに、その悲劇が今もなお続いていることへの憤りを感じます。早く戦争が終わることを願うばかりです。

今年も残すところわずかになりましたが、来年は良い年でありますよう、そして会員の皆様のご活躍とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

（相臺志浩）